

二〇二二年二月四日

追儀豆踏みて赤鬼よろけたり
春を待つ色紙短冊掛け替へて
見晴るかす沖の群青春めきぬ
雪だるま七個並びし週間予報
大泣きの吾子にくずおれ追儀鬼
ふらここや小さきマントひるがへし
春光の飛沫さながら雀散る

二〇二二年二月三日

コロナ菌失せよと年の豆を撒く
室咲きの花園とせむ棺の中
寿の案内書とどく春隣
くれなるの帯胸高に鬼やらひ
恵方巻丸太のごとく積まれ売る
子の頬に飯粒一つ春立てり

二〇二二年二月二日

あたたかや存問メール音符つき
笹の葉の風花さらと受け流し
参列の叶わぬ葬や春寒し
寒晴の空へ新船組み上がる
ポンポン船隅田川ゆく光風裡
雪垣に仄と灯の洩る合掌家
漁良しと届く電信島小春

二〇二二年二月一日

春泥の靴の散らばる書道塾
左右から畦塗りはじむ夫婦かな
母逝きし朝や真白き春の雲
日脚伸ぶ鍵の振れるランドセル
早梅や墓誌に加へし白き文字
春山路柵伐る音銜して

やよい 満天 素秀 こそす やよい あひる ひのと 満天 あひる せつ子 ひのと みきえ なつき あひる よう子 あひる ひのと 智恵子 凡士 ひのと 凡士 なつき 凡士

フラスコの光透かしてヒヤシンス
春迎ふ老いたればこそダンディーに
二〇二二年一月三十一日

赤マフラーして吟行すわれ白寿
けんけんぱして春泥を飛び越し来
落合に三川せめぐ春隣
ランドセルからこぼれたる福の豆
長箸に伸びる素麺寒造り
美容師の指圧に眠し春の昼
あたたかや人を繋ぎて母逝けり
鉢分けの苗元気さう春きざす

二〇二二年一月三〇日

調律のギター爪弾く春隣
天守閣春満月を掲げけり
下ごしらへ夫の気配りあたたかし
焼諸の笛がわたしを呼んでゐる
色鉛筆削りそろへて春を待つ
墨痕に微かな震へ寒見舞
参道の左右なる冬芽存問す
春愁のわが無精ひげな咎めそ

二〇二二年一月二十九日

下萌の足裏を弾く散歩かな
金坑の手掘の跡のあたたかし
朝霧の晴れて山容泰然と
野を行けば春の空あるにわたづみ
聞こえる市歌のチャイムや日脚伸ぶ
熱爛や儲からぬ日は口閉ざし

もとこ せいじ 董雨 ひのと たか子 ひのと 千鶴 よう子 あひる 明日香 素秀 みきお 明日香 むべ ひのと ひのと ぼんこ せいじ あひる 宏虎 千鶴 あひる せつ子 ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年二月六日